

お盆について

～ 盂蘭盆御書にいわく～

悪の中の大惡は、我が身にその苦をうくるのみならず、子と孫と末え七代までも、かかり候いけるなり。

善の中の大善も、またまたかくのごとし。目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給う。

上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存外に仏となり給う。

目連尊者と盂蘭盆の起源

釈尊の十大弟子の一人。

目連尊者が餓鬼道に墮ちた母を苦しみから救おうと供養したという『盂蘭盆経』に由来。目連尊者が法華経を信じた功徳によって自身が成仏し、同時に両親をはじめ先祖、子孫も成仏できたといわれる。

仏音「お盆によせて」

平成6(1994年)年

7月12日発行

第29号よりより

春秋

心身の調子が悪くて病院や診療所に行く。診察を終えた患者の多くは飲むべき薬を指定した処方箋を受け取る。このとき薬ではなく、体操や音楽、ボランティアなど、参加すべきサークル活動を医者が紹介したらどうか。英国で近年そうした試みが広がっているという。

▼薬のかわりに社会とのつながりを処方する点から社会的処方と呼ぶそうだ。英ガーディアン紙によれば釣りや編み物の集まりに参加した高齢者がうつ病から脱したなどの例がある。英工コノミスト誌は先日、ロンドンやリバプールなどにこの仕組みが広がった結果、医療費の節約や医師の負担減につながったと伝えている。

▼日本でも同じようなことができないか。そう考えた川崎市立の井田病院に勤める医師、西智弘さんは今月、地元で「社会的処方研究所」を立ち上げた。街の人々が足を使ってサークル活動などの情報を集め、医師や看護師が医療の視点で中身を精査する。いすれ処方箋集としてまとめて、広く活用してもらうつもりだという。

▼第1回の会合を覗くと、手弁当での参加者が住民や福祉関係者など約30人。「取材時に聞くべき事を忘れないよう質問リストを作ろう」といった前向きなアイデアで盛り上がった。家で飲む薬が増える。国の懐を医療費が圧迫する。病気を巡る話題は暗くなりがちだ。街が生み出すイノベーションは解決策を提示できるか。